継承 若者が燃える

14年の歳月が流れ、後継者不足に悩んでいた ふだい荒磯太鼓。しかし今、8人の若者が加わり、その継承に燃えている。

熱のこもった稽古をするメンバー。稽古場には独特な空気が張りつめる

三船さん(左)から真剣な表情で指導を受ける。上達に近道はない

稽古が始まると心を無にし集中する

全身を使って打ち鳴らす。和太鼓の大きな魅力だ

「思いどおりに打てない。なぜだ…」。休憩の合間にもイメージトレーニングを続ける

仲間を誘い合い 8人がそろった

今から2年前、ふだい荒磯太鼓事務局長の三船雄三さん(52)が、楽器の好きな羽場はるかさん(18)をチームに誘った。彼女は二つ返事でチームに加わった。そして昨年7月三船さんの甥に当たる三船洋介さん(27)が、普代に帰ってきたのを機に、チームに参加した。洋介さんは仲間を誘った。「お前がやるならおれもやる」仲間が仲間を誘い、メンバーが増えていった。

さらに羽場さんが同級生の野田村の畑村愛香さん(18)を連れて来た。昨年10月、ここに新たな8人のメンバーが誕生した。

佐藤毅さん(39)、野田口純一さん(35)、赤坂訓さん(32)、三田地勇治さん(31)、三船洋介さん、三船尊生栄さん(24)、羽場はるかさん、畑村愛香さん。荒磯太鼓の未来を背負う8人だ。

見るものを圧倒 和太鼓のすごさ

荒磯太鼓の稽古場は村の中心部から西に約5キロ離れた、鵜鳥神社近くにある郷土文化伝習施設。

9月28日午後7時、稽古場を訪ねた。暗やみの中に1カ所だけ明かりがついている。稽古場だ。車を降り玄関の戸を開けた瞬間、地鳴りのような音がした。恐る恐る稽古場のドアを開けると「セイ、ソイヤー」「まだまだー!!」。和太鼓に向かう8人の真剣な姿が飛び込んできた。

彼らを指導しているのは事務局長の三船さんと会員の川向正人さん(44)だ。2人は結成当時からのメンバーで、もちろん自らも打つが、今は彼らの指導に余念がない。

「稽古を続けるぞ」。三船さんの一言で稽古場は一気に空気が変わる。稽古が始まるとテーブルの上に置いたカメラのキャップが振動で床に落ちた。ものすごい迫力だ。見るものが息を飲む。

「よし、休憩しよう」。その声と同時に8人は苦しそうにその場に座り込んだ。顔から汗が床にしたたり落ちる。男たちの背中から湯気が上がっている。これが和太鼓なのか。

1曲終わり、ぐったりする佐藤さん(左)と水分を補給する三田地さん。稽古の厳しさが伝わってくる

鋭いまなざしで8人を見つめる三船さん(左)と嘉藤会長

衣装を着ての稽古は普段の倍疲れるという

初披露は未完成 悔しさ胸に稽古

彼らは昨年の10月から週3回、約2カ月間の稽古を重ね、12月の歳末チャリティー演芸会で村民に初披露した。皆「あのときは未完成だった」と話す。「自分たちの甘さを思い知っただろう」と指導する三船さんが笑った。

稽古は現在、基本的に週1回。発表が近いときや、新曲に取り組み出すと2回、3回と増えていく。

「何度やってもうまくできるか不安ですよ」と大太鼓を担当する三田地さんは言う。「背中が痛い」長年ふだいまつりの大太鼓を打っている佐藤さんのこの言葉からも、稽古の激しさが伝わってくる。

10月1日、再び稽古場を訪れた。彼らは10月7日の「ふだいまるごと海産まつり」の発表に向けて汗を流していた。相変わらず迫力満点だ。

静かに見ていた嘉藤会長が突然稽古を止めた。「やめ、やめー」皆が会長の方を向く。「いいか、まずお前たちは曲を打つときの緊張感がない。指先まで神経を使え。苦しいところだが、大丈夫。時間はある」。

10月5日、ふだいまるごと海産まつり2日前だ。発表前に、衣装を付けての稽古の準備だ。しかし、独特の衣装に着付けもままならない。赤坂さんは「ただでさえ太鼓でいっぱいなのに…」と漏らす。

衣装の着付けは慣れると10～15分でできるというが、この日は着るまでに1時間がたっていた。「衣装の着方もたたみ方も素人、すべてがまだまだ」と三船さんは厳しい。「さあ、始めるぞ」。衣装を付けての稽古が再開された。

未来につながる 新たな郷土芸能

なぜ、若者がこれほどまでに厳しい稽古に打ち込むのか。そして継続できるのか不思議に思えた。しかし、彼らの口からは、「和太鼓は楽しいです」という言葉がいつも返ってくる。打つ者しか分からない和太鼓の魅力なのか――。

ふだい荒磯太鼓は村に新しい文化を育てようと行政主体でスタートした。しかし、彼らには新しい文化や村の活性化のためにやっているという強い意識はなかった。「和太鼓が好きだ。もっとうまくなりたい。その成果をたくさんの人に見せたい。見る人、聴く人を感動させたい。そしてさらに上を目指したい」それだけなのだ。

「もっと会員を増やし、一緒に楽しみたい」彼らは口を揃えて言う。そして、稽古に臨む目には一点の曇りもない。

彼らは気付いてないかも知れないが彼らの活動がこの先10年、20年と続いたら、間違いなく「伝統芸能」として村に根付くだろう。新しい伝統とはそうしてつくられていくものなのかもしれない。

現在荒磯太鼓には、飛鳥先生が作曲した「ふだい荒磯太鼓」「波涛の響き」「深山」「SAZARE」「打てや囃さん」の5曲の演目がある。1曲打てるようになるまで、最低でも半年はかかるという。彼らは今日も全力で和太鼓に向かう。

はるかをずっと応援するからね

羽場　はるさん
(60歳・中央区)

孫のはるかは、小さいとき引っ込みじあんでしたが、太鼓などいろんなことを始めてから、生き生きしてきました。私は「何でもやれるのは若いうちだけなんだから、好きなことだったら頑張れ」と応援してきました。

おととしのふだいまるごと海産まつりで立派に発表していたのを見て、頑張ったかいがあったとうれしく思いました。今の経験は、将来きっと本人の役に立つと思います。これからも応援していきたいです。